

社会保険旬報

2024 1/21

No.2916

レコーダ

民間病院の経営状況と対策

…加納繁照

論評

半公半民のドイツ開業家庭医—コロナに積極対応…吉田恵子

特別レポート

医療・介護の現場の取り組み—わかたけヘルスケアの業績発表会

潮流

「重症度、医療・看護必要度」見直しでシミュレーション

潮流

中医協が薬価制度改革を決定

資料

医科・学科試験問題の解答と解説…第59回診療報酬請求事務能力認定試験

特別レポート

医療・介護の現場の取り組み 地域住民ファーストを共有

―わかたけヘルスケアの業績発表会

社会医療法人若竹会（茨城県牛久市）と社会福祉法人若竹会（同）でなる医療・介護グループ「わかたけヘルスケアシステム」は昨年11月23日、グループ全職員が参加する「わかたけヘルスケアシステム医療・介護業績発表会」を開催した。同グループの医療・介護現場の一年間の取り組みを発表し、グループの理念である、患者・利



挨拶する竹島会長

用者を含めた「地域住民ファースト」の考えを改めて共有した。

挨拶に立った社会医療法人若竹会の竹島徹会長は、「発表会を開催する狙いは、若手の育成と職員の交流、さらには医療・介護技術の向上だ。医療職だけではなく、事務職も含めて同じ場所で発表できることはすばらしいことだ」と述べた。

■医療33、介護24の口演を実施

発表会は、社会医療法人若竹会が運営するつくばセントラル病院（313床）の開院2年目の平成2年に第1回を開催。以降、規模を拡大して、今回の第34回発表会の口演数は医療33、介護24の合計57となった。

発表会のスタート当初、口演は医療のみだったが、平成9年にグ

ループに、つくばセントラル病院の併設施設として介護老人保健施設（老健）「セントラルゆうあい」が加わったため、同年の発表会から介護の口演が始まった。

グループの方向性について講演したつくばセントラル病院の金子剛院長は、「この業績発表会の副題として掲げた『地域に寄り添う医療と福祉』はまさにグループの目指す目標だ」と強調した。

■5類移行後のケアに変化

口演の中には、過去4年弱続いた新型コロナウイルス禍の取り組みや、そこで得た教訓を総括したテーマが複数あった。

つくばセントラル病院C病棟3階勤務の看護師の木暮美弥氏は「コロナ病棟の4年間の取り組みと今後の課題」というテーマで、コロナと対峙しながら、どのように患者の療養生活の改善などに取り組んできたかを発表した。

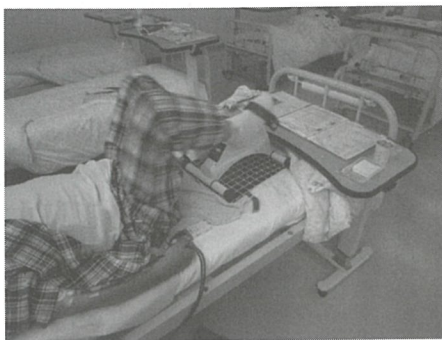
同病院はコロナ感染症入院受け入れ医療機関として、軽症・中等症のコロナ患者を受け入れている。同病院のC病棟3階と4階病棟は受け入れ開始から現在まで、

コロナ病棟として稼働している。

約4年間のコロナ患者への対応を総括し、意識や心境の変化を振り返るために、木暮氏らの発表チームは、C病棟3階と4階の看護師にアンケートを実施。その中で、コロナが5類に移行したこと、①患者とのコミュニケーションの向上②患者中心のケアの向上が図られているという結果となった。

コロナが感染症法上5類に移行する前は、患者の部屋に入るだけでもフェイスシールド、ガウン、キャップなどを着用し、互いの顔が見えにくい状態だった。しかし、5類移行で基本的感染対策が見直され、ケアの場面に応じた安全機材と個人用防護具（PPE）を選択することができるようになった。それによって、患者の状態をより正確に理解し、必要なケアを提供するためのコミュニケーションの改善につながったという。

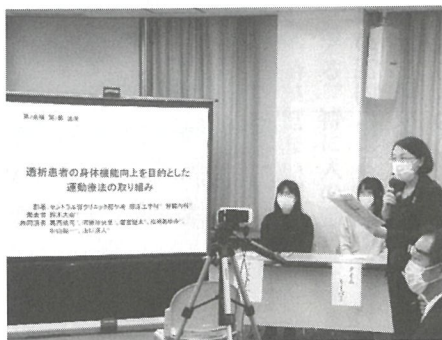
2つ目の「患者中心のケアの向上」については、5類移行で患者の日常生活動作（ADL）や退院調整について考える機会が増えたからだと推察している。



エルゴメーターで運動する患者

患者や家族の個別の希望とニーズに対応できるようになったほか、コロナ患者にも医療相談員などの多職種が介入できるようになり、スムーズな退院調整ができるようになった。これらにより患者中心の看護が実現し、患者やその家族の希望に合わせた看護を提供することにつながったと説明した。

一方、木暮氏らは今後のケアについての課題もあげた。5類移行で高齢者の入院が多くなり、体動困難で入院し、転倒などを考慮して体動制限することによるADL低下をいかに最小限にするかが大事になってくると強調した。



フロアから質問する金子理事長

■透析患者に対し運動療法

セントラル腎クリニック龍ヶ崎に所属する臨床工学技士の鈴木大樹氏は「透析患者の身体機能向上を目的とした運動療法の取り組み」というテーマで口演した。

患者が透析治療を継続する中で、日常生活が制限され、サルコペニア・フレイルとなるリスクが高いため、このリスクを軽減しようという発想が、この取り組みのきっかけだ。令和4年度診療報酬改定で透析患者に対し運動療法が推奨され、透析時運動指導等加算が新設されたことも背景にある。

透析患者に運動習慣を身に付け

てもらうために、寝ながら足でペダルをこぐことで運動ができる機器（エルゴメーター）を使用し、透析中での有酸素運動をしてみようと考えた。運動時間は20〜60分で透析前半に実施。運動中は、心電図、血圧、 SpO_2 （酸素飽和度）値を測定。運動の強度は運動中に会話ができて軽く汗をかく程度とした。

一方、運動療法を中止する基準も厳格に設けた。中止基準の主なものは、▽運動中、中等度の呼吸困難、めまい、嘔気、狭心痛などが出現した場合▽運動中、脈拍が140/分を超えた場合▽ SpO_2 値が運動開始前から3%以上低下した場合などとした。

3人の患者が対象となり、2人が中止基準に該当し離脱した。このため、今後の課題として鈴木氏は、「有酸素運動を継続していく上で、運動中は血流速度など透析条件の見直しをすることにより、離脱患者の減少を図っていきたい」と話した。

3人目については3か月後、身体組成分析において変化が見られ、有酸素運動の効果・日常生活

の変化について長期的に観察していく必要があったという。

結びで鈴木氏は「エルゴメーターを活用した有酸素運動は運動習慣の啓発を促し、運動意識の自立を促すことができたと思われる。今後、対象患者の選定において精査を重ねながら透析中の有酸素運動を推進していきたい」と述べた。

■発表することで自信深まる

発表会の最後には、社会医療法人若竹会の金子洋子理事長がわかたけヘルスケアシステム代表理事として登壇した。金子理事長は、つくばセントラル病院の腎センター長を務める。

金子理事長は「活発な討議がされて頼もしい発表会だった。年々、スライドも見やすく工夫され、講演者の声も大きくて努力がにじみ出ている。発表を迎えるまでは緊張するだろうが、準備をして発表することで自信も深まる。来年もよりよい発表会になるようにしたい」と期待を込めた。

（えむでぶ倶楽部ニューズ編集部 君塚靖）